

7月予報（全12枚）

病防第51号
平成19年6月29日

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
平成19年度発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成19年度発生予報第4号（7月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成19年6月22日福岡管区気象台発表（単位：％）

要 素	予 報 対 象 地 域	低 い （少ない）	平年並	高 い （多い）
気 温	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40
降 水 量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	30	40

2 発生予報 概要

作 物		病害虫名	発 生 量		作 物	病害虫名	発 生 量	
			平年比	前年比			平年比	前年比
水 稲	早 期	穂いもち	ㇿ少	並	茶	もち病	ㇿ少	ㇿ少
	早 植	葉いもち	並	ㇿ多		チャノカモノヅメ	ㇿ多	ㇿ多
	普通期	葉いもち	ㇿ少	並		チャハマキ	ㇿ少	ㇿ少
	早期・早植	紋枯病	並	並		チャノホソガ	ㇿ少	ㇿ少
	早 期	かみし類	並	並		チャノアザミ	並	ㇿ少
	早植・ 普通期	ツマクノコバエ	並	並		チャノミナモト	並	ㇿ多
		ヒメビロウカ	ㇿ多	ㇿ多		かざりタニ	ㇿ少	並
		セジロウカ	ㇿ多	並	カンキツ	かいよう病	並	ㇿ少
		ヒメビロウカ	ㇿ多	並		黒点病	並	並
茶			並	並		ミカンハダニ	並	並
			ㇿ少	ㇿ少		チャノアザミ	並	並

作 物	病害虫名	発 生 量		作 物	病害虫名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
ナ シ	黒星病	並	やや少	夏秋果菜類 (高冷地)	灰色かび病	並	並
カ キ	炭疽病	並	やや少		細菌性病害 (黒腐病等)	並	並
ブドウ	べと病	並	並	夏秋キャベツ (高冷地)	コナジラミ類	やや多	やや多
果樹全般	果樹カミシ類	少	少	夏秋果菜類	アザミウマ類	やや多	やや多
夏秋トマト (高冷地)	葉かび病	並	並		ハダニ類	やや多	やや多
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	やや多	イチゴ (育苗床)	コナガ	やや多	やや多
夏秋カリカリ (高冷地)	べと病	並	並	夏秋キャベツ (高冷地)	ハスモンヨトウ	並	並
イチゴ (育苗床)	うどんこ病	やや多	やや多	野菜全般	材外ハコガ	並	並
	炭疽病	並	並				

3 予報概要、根拠、対策等

水稻

1) 穂いもち(早期)

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の早期水稻の巡回調査では、葉いもち発生は認めず(平年 7.2 %)、平年より少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の葉いもちの発生は概ね平年比やや少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ後期に防除する。

2) 葉いもち(早植)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の早植水稻の巡回調査では、葉いもちの発病株率 0.3 %(平年 0.1 %)と平年並の発生であった。

イ BLASTAM の判定結果では、5月4半旬～6月3半旬までの好適条件出現日数は平年よりやや多い。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は概ね平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア いもち菌は 25 前後で湿度が高いときに増殖しやすい。気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。

3) 葉いもち(普通期)

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 6 月の普通期水稻の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の発病株率 0.0 %)。
- イ 病虫害防除員からの報告では、苗いもちの発生は平年比やや少であった。
- ウ 気象予報によると、7 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア いもち病に効果のある育苗箱施薬剤を使用していないほ場においては、気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。
- 4) 紋枯病 (早期・早植)
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、発病を認めていない(平年の発病株率 0.0 %)。
- イ 気象予報によると、7 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行う (要防除水準：穂ばらみ期の発病株率 20 %)。
- 5) カメムシ類 (早期)
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 上天草市松島町におけるイタリアンライグラス及びイネ科雑草でのすくい取り調査では、ミナミアオカメムシ及びシラホシカメムシの捕獲数は過去 4 年よりやや多かった。アカスジカスミカメは過去 4 年並だった。ホソハリカメムシは過去 4 年よりやや少なかった。最重要種であるクモヘリカメムシは過去 4 年並だった。
- イ 気象予報によると、7 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 毎年被害を受ける地域では、穂揃期とその 1 週間～ 10 日後に薬剤散布を行う。
- イ 水稻出穂後に周辺雑草を除草すると、本田への飛来を助長するので行わない。
- 6) ツマグロヨコバイ (早植・普通期)
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 6 月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり 0.2 頭(平年 0.2 頭) と平年並の発生であった。
- イ 生産環境研究所 (合志市) における予察灯調査では、平年より少なかった。
- ウ 病虫害防除員の報告では、6 月の発生は概ね平年比やや少であった。
- エ 気象予報によると、7 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- 7) ヒメトビウンカ (早植・普通期)
- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6 月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり 2.5 頭(平年 0.4 頭) と平年比多の発生であった。
- イ 生産環境研究所 (合志市) における予察灯調査では、平年並の誘殺数だった。
- ウ 病虫害防除員の報告では、6 月の発生は概ね平年比やや少であった。
- エ 気象予報によると、7 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア ヒメトビウンカでは吸汁害よりも、媒介するウイルス病 (縞葉枯病) が問題となる。縞葉枯病の常発地では、育苗箱施薬剤を使用しているも本田初～中期のヒメトビウンカの発生に注意し、成幼虫の発生量が多い場合は本田防除を行う。
- イ 一部薬剤で感受性の低下が確認されているので、薬剤の選定には注意する。
- 8) セジロウンカ (早植・普通期)

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6 月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり 4.9 頭(平成 0.5 頭)と平成比多の発生であった。

イ 予察灯及びネットトラップの調査では、生産環境研究所(合志市)では 6 月 16 日と 24 日に飛来波があり、現在までの飛来量は過去 5 年より多い。天草農業研究所(天草市)では 5 月 27 ~ 29 日及び 6 月 15 ~ 17 日現在にまとまった飛来が見られており、うち 5 月の飛来量は過去 5 年より多い。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 育苗箱施薬剤を使用していないほ場では、ほ場密度が高い場合に本田散布を行う(要防除水準：水稻移植後 10 日までは 2 ~ 5 頭/株、11 日以降は 6 ~ 10 頭/株)。

イ 一部薬剤(フィプロニル)に対して感受性の低い個体群が確認されており、薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

9) トビイロウンカ(早植・普通期)

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、発生を認めていない(平成 0.0 頭)。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯及びネットトラップ調査では、6 月 24 日に初飛来を確認した(過去 10 年平均の初飛来日 6 月 10 日)。飛来源である中国南部での発生量が多いと報告されており、今後の飛来量は平成より多いと予測される。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 今後の飛来情報と、ほ場での発生状況に注意し防除を行う(要防除水準：7 月下旬 ~ 8 月上旬において、20 頭以上/100 株)。

イ 一部薬剤(イミダクロプリド)に対して感受性の低い個体群が確認されており、薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

10) コブノメイガ(早植・普通期)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、発生を認めなかった(平成の巻葉数 0.0 枚/株)。

イ 天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、6 月 3 半旬現在まで誘殺を認めていない。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア コブノメイガに効果のある育苗箱施薬剤を使用していないほ場において発生が多い場合は、第 2 世代幼虫期(飛来世代 第 1 世代幼虫 ~ 成虫 第 2 世代幼虫)に防除を行う(要防除水準：第 1 世代において被害株率 20 % 以上)。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6 月の巡回調査では、発病葉数は 1.0 葉/㎡(平成 2.4 葉/㎡)と平成よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6 月の発生は平成並 ~ 少であった。

ウ 気象予報によると、7 月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(4) 対策 ア 今後、曇りや雨の日が続き、感染に好適な条件になることも予想されるため、常発地では、摘採残葉の発病状況等に注意し、三番茶萌芽期 ~ 1 葉期に防除を行う。

2) もち病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉を認めず(平成 1.1 葉 / m²)、平成よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 二番茶に多発した茶園では、二番茶摘採後に整せん枝を行い、発病葉を摘採面から除去する。

3) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉数は 1.7 / m² (平成 0.4 枚 / m²) と、平成よりやや多い発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市) のフェロモントラップでは、発蛾最盛期は平成より1半旬早い6月3半旬であった。ピーク時の誘殺数は平成並となったが、平成よりやや少ない発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町) の調査では、発蛾最盛期は6月3半旬(平成並) で、発生量は平成比やや多の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや多～少と地域によって差があった。

オ 気象予報によると、7月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 次世代の発蛾最盛期は平成(7月5半旬～6半旬) より早くなることが予想されるので、ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。通常、各茶期の摘採直後が防除適期になる。

イ 中刈り等の更新は、産卵及び生息場所を失うため密度低下に効果がある。

4) チャハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉は認められず(平成 0.1 枚 / m²)、平成よりやや少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市) のフェロモントラップでは、平成よりやや少ない発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町) の調査では、発蛾最盛期は平成より2半旬早い6月1半旬で、平成並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～少であった。

(3) 対策 ア チャノコカクモンハマキに準じる。

5) チャノホソガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉数は 0.4 枚 / m² (平成 6.7 枚 / m²) と平成より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市) のフェロモントラップでは、平成よりやや多い発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町) の調査では、平成よりやや少ない発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比やや少～少であった。

(3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の萌芽～1葉期に防除する。

イ 摘採間近になって三角葉巻が見られた場合は、防除せず、摘採を早めて被害の軽減に努める。

6) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は 5.6 % (平成 9.4 %) と平成よりやや少ない発生であった。

- イ 生産環境研究所（合志市）の粘着トラップでは、平年並の発生であった。
- ウ 茶業研究所（御船町）の調査では、平年より少ない発生であった。
- エ 気象予報によると、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 三番茶を摘採する園では、新芽を加害をするため、萌芽期から1葉期に防除を行う。また、二・三番茶摘採後も摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤で防除する。

7) チャノミドリヒメヨコバイ

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は1.4%（平年2.9%）と平年よりやや少ない発生であった。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、平年より少ない発生であった。

ウ 病害虫防除員の報告によると、6月の発生は平年比やや多～並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 新芽を加害するので、萌芽～1葉期に防除を行う。

イ チャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

8) カンザワハダニ

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率1.0%（平年5.6%）と平年より少ない発生であった。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、平年より少ない発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～やや少であった。

（3）対策 ア 発生が多くなってからは、どの薬剤も効果が上がらないため、発生初期の防除に心がける。

イ 摘採前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カンキツ

1) かいよう病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、新葉の発病葉率は1.6%（平年4.0%）で平年比やや少ない発生であった。

イ 果樹研究所（宇城市）の調査（無防除樹の甘夏）では、5月18日（平年19日）に春葉の初発を認め、果実は6月17日（平年19日）で、6月6半旬の春葉の発病率は3.4%（平年12.7%）、果実の発病率は18.0%（平年17.4%）であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少である。

エ 気象予報によると、7月の降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 夏秋梢のミカハグサの食害痕に、本病が発生しやすいので防除を徹底し、発病した葉・枝・果実はなるべく剪除する。

イ 果樹研究所（宇城市）における無防除の甘夏の果実の発病最盛期は、6月5半旬～7月4半旬であるので、発病前の防除を徹底する。

2) 黒点病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった。

イ 果樹研究所の調査（無防除樹の興津早生）では、6月4日（平年5月27

日)に果実の初発を認め、6月6半旬の果実の発病率は34.0%(平年34.2%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少である。

エ 気象予報によると、7月の降水量は平年並の予想である。

(3)対策 ア 伝染源は枯枝で、剪定枝を園内に放置していると発病が多くなるので園外に処分する。

イ 果樹研究所(宇城市)における果実の発病最盛期は、7月2半旬～5半旬であるので、発病前の防除を徹底する。

ウ 定期的に園を見回り降水量200～250mmまたは前回散布から25～30日経過したら防除を行う。

3)ミカンハダニ

(1)発生量:並

(2)根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率7.0%(平年25.2%)で平年比少の発生であった。

イ 果樹研究所の調査(無防除樹)では、6月5半旬の寄生葉率は0.0%(平年28.9%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～並である。

エ 気象予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3)対策 ア ミカンハダニの要防除水準はメス成虫の寄生葉率30～40%、10葉当り5～10頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

5)チャノキイロアザミウマ

(1)発生量:並

(2)根拠 ア 6月の巡回調査では、被害果の発生を認めなかった。

イ 気象予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3)対策 ア 発生程度の調査は、展着剤あるいは洗剤を5,000～10,000倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実(100果)を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実態顕微鏡で虫数を調査する。調査の結果10頭以上を確認したら直ちに防除する。

ナシ

1)黒星病

(1)発生量:並

(2)根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率0.0%(平年0.8%)と平年比やや少であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～やや少と地域によって発生が異なった。

ウ 気象予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3)対策 ア 発病した葉や果実は園外に処分する。

イ 防除を徹底するとともに園の排水に努める。

カキ

1)炭疽病

(1)発生量:並

(2)根拠 ア 6月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった。

イ 気象予報によると、7月の降水量は平年並の予想である。

(3)対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。

イ 新梢、果実とも発病後の防除では効果がないので、この時期の防除を徹底する。

ブドウ

1) ベと病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率 2.0 % (平年 1.6 %) で平年並の発生であった。

イ 気象予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3) 対策 ア 発病後は防除が難しいので、予防散布に努める。

果樹全般 (スモモ、モモ、カキ、ナシ、ブドウ、カンキツ類等)

1) カメムシ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 生産環境研究所 (合志市)、果樹研究所 (宇城市) および天草農業研究所 (天草市) における予察灯やフェロモントラップの誘殺数は平年比少であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少～少であった。

(3) 対策 ア カメムシの発生は地域差が大きいので、注意を怠らず園をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

野菜病害

夏秋トマト、ミニトマト (高冷地)

1) 葉かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生は認めなかった (平年の発病株率 0.5 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 発病初期から葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行い、被害葉や老化葉は除去する。

イ 肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

夏秋ナス (平坦地)

1) すすかび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病株率 4.3 % (平年 0.7 %) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並、日照時間は多い予想である。

(3) 対策 ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。

イ 初期の発病葉は早めに除去する。また、ハウスやその周辺に病葉を放置すると伝染源になるので、摘除後は速やかに処分する。

ウ 薬剤防除は発生初期に行う。

夏秋キュウリ (高冷地)

1) ベと病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生は認めなかった (平年の発病株率 12.7 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 하우스栽培では、換気を良くし過湿防止に努める。
イ 肥培管理を良くし肥料切れしないようにする。
ウ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

イチゴ（育苗床）

1) うどんこ病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査（育苗床）では、発生は認めなかった（平年の発病株率 18.5 %）。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 今後、菌そうが消失して目立たなくなるが、盛夏でも病原菌は潜在感染しており、秋になると再び発病する可能性がある。早めの防除で、菌密度を下げておく。

イ 発病葉や不要な下葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分し、薬剤散布は葉裏に十分かかるように散布する。

ウ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。

エ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

2) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査（育苗床）では、発生は認めなかった（平年の発病株率 1.2 %）。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 育苗ほ場は必ず雨よけを行い、排水に留意する。

イ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後には感染しやすいので、防除を徹底する。

ウ 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、被害茎葉や被害株は速やかにほ場外に持ち出し袋などにいれて密閉処分し、伝染源を少なくする。

夏秋果菜類（高冷地）

1) 灰色かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月のトマト、キュウリの巡回調査では、発病を認めなかった（平年の発病株率トマト 0.1 %、キュウリ 0.1 %）。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は概ね平年並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並、日照時間は多い予想である。

(3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ（高冷地）

1) 細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病）

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率は黒腐病 2.8 %、軟腐病、黒斑細菌病ともに 0.0 %）。

- イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。
イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

野菜虫害

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

- (1) 発生量：やや多
(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率が2.7%(平年12.0%)と平年比やや少、高冷地のトマトでは寄生葉率が7.0%(平年1.4%)と平年比やや多、高冷地のキュウリでは寄生葉率が14.0%(平年3.2%)と平年比やや多の発生であった。なお高冷地で確認された種はオンシツコナジラミであった。
イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～並であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 今後定植する場合は、寄生苗を本ばに持ち込まないように注意する。
イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。
エ 「トマト黄化葉巻病」の育苗期の防除対策については別枠参照。

2) アザミウマ類

- (1) 発生量：やや多
(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率が3.7%(平年6.3%)と平年比やや少、高冷地のキュウリでは寄生葉率が18.7%(平年2.8%)と平年比やや多の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～並であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。
ウ ミナミキイロアザミウマはメロン黄化えそウイルスを媒介するので、キュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期からミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。

イチゴ(育苗床)

1) ハダニ類

- (1) 発生量：やや多
(2) 根拠 ア 6月の巡回調査(育苗床)では、寄生株率32.0%(平年3.0%)で平年比多の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ（高冷地）

1) コナガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生株率 25.0 % (平年 14.9 %)、10 株当たり寄生頭数が 3.2 頭 (平年 2.0 頭) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスで寄生株率 0.3 % (平年 0.0 %) で平年並、イチゴ、高冷地のトマト、キャベツでは発生は認めなかった (平年の寄生株率イチゴ 0.0 %、トマト 0.0 %、キャベツ 0.0 %)。

イ 生産環境研究所 (合志市) とい業研究所 (八代市鏡町) におけるフェロモントラップによる6月の誘殺数は平年よりやや少なく、阿蘇市波野と山都町鶴底では平年並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平坦地のナスで発生が確認され、発生量は平年並。その他では発生は認められていない。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナス、高冷地のトマトでは発生は認めなかった (平年の寄生株率ナス 0.0 %、トマト 0.0 %)。

イ 生産環境研究所 (合志市) とい業研究所 (八代市鏡町) におけるフェロモントラップによる6月の誘殺数は平年比やや少、山都町鶴底では平年比少、高原農業研究所 (阿蘇市一の宮町) ではまだ誘殺は認められていない。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はナスで初発が確認されたが、発生量は平年並。その他の作物では発生は確認されていない。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

「トマト黄化葉巻病」育苗期の防除対策！！

現在、促成トマト、ミニトマトの栽培が終了し、今後は次作の育苗が始まります。トマト黄化葉巻病の今後の発生を抑制するためには、感染源の除去と保毒虫のハウス内侵入を防ぐことが重要です。当面の対策として、以下の防除対策を徹底しましょう。

<育苗期の防除対策>

- (1) 播種 10 日前にハウス内・周囲の雑草を防除する。
- (2) 育苗施設の開口部（サイド、換気部など）には必ず防虫ネットを設置する。
なお、ネットの目合いは小さくするほど侵入を阻止する効果は高いが、高温対策に留意する。
- (3) 近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを 150 cm 幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。
- (4) ハウス内に黄色粘着トラップを設置し、侵入したコナジラミの密度を低下させる。
- (5) ハウス内へのコナジラミの侵入状況を見ながら系統の異なる薬剤を散布し、育苗後期には登録のある粒剤をポット処理する。
- (6) 発病苗は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (7) 野良生えトマトは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

農薬安全使用上の留意点

ポジティブリスト制度の施行により、全ての農薬、作物に残留基準値が設定され、基準値を超えたものは流通が禁止されています。薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用するとともに、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守すること。また薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底すること。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上で公開しています。